

文久二年幕府派遣「千歳丸」随員の中国観

— 長崎発中国行の第1号は上海で何をみたか —

横 山 宏 章

The first visit to Shanghai by the “Senzai-maru” in 1862

YOKOYAMA Hiroaki

一 千歳丸の上海派遣

今から140年前の1862年、すなわち文久二年に徳川幕府は官船の千歳丸を上海へ派遣した。1854年の開国以来、8年にして初の中国派遣船である。1862年5月27日（文久二年四月二十九日）に長崎を出航し、6月3日（五月六日）に上海へ到着した。長崎から上海へ8日ほどかかった。鎖国時代の長崎は中国からの唐船貿易が盛んに行われていたが、日本人が中国に渡ることは禁じられており、漂流を除けば、日本人が中国を正式に見聞するのは2世紀ぶりであった。

帰国のために上海を出帆したのは7月31日（七月五日）、長崎へ戻ったのが8月9日（七月十四日）。約2カ月間、使節団は上海に逗留したことになる。千歳丸は幕府が長崎で購入したイギリス商船（「船号アルミスティス」¹Armistice）で、3本マストをもつ358トンの帆船である。派遣された日本人は役人、従者、医師、唐通事、阿蘭通詞、長崎商人、炊夫、水手など51名。それに船員はイギリス人を中心に16名。従者のなかに幕末最大の志士の1人である高杉晋作がいたことは有名である。

千歳丸の派遣目的、派遣への政策決定、中国との交渉過程、貿易業務等については、これまでの研究にまかせる²として、ここでは残された様々な上海見聞録を通し、日本人が初めてみた上海、中国、ないしは中国人へのイメージを明らかにし、明治期に形成された日本人の中国観の原点を探り出したい。

二 8人の見聞録

千歳丸で上海に派遣された人々のなかで、見聞録を残しているのは現在確認できるものとしては次の8人である³。

高杉 晋作（長州藩）	「遊清五録」
中牟田倉之助（佐賀藩）	『中牟田倉之助伝』
納富介次郎（佐賀藩）	「上海雑記」
日比野輝寛（高須藩）	「贅脱録」「没鼻筆語」
峰潔（源蔵）（大村藩）	「船中日録」「清国上海見聞録」
名倉予何人（浜松藩）	「海外日録」「支那見聞録」

松田屋伴吉 (長崎商人) 「唐国渡海日記」「唐国渡海日録」

岩瀬弥四郎 (阿蘭小通詞並) 「文久酉戌上海記録」

何といても最大の著名人は高杉晋作である。「遊清五録」は「航海日録」「上海掩留日録」「続航海日録」「長崎淹留雑録」「内情探索録」「外情探索録」等からなる。中牟田倉之助については、「上海行日記」等の5本の記録が残っているようであるが、それをもとに書かれた伝記に、部分的に紹介されているにとどまっている。他に著名人としては、実業家として活躍した薩摩藩の五代友厚(才介)が水夫として参加しているが、記録は残していないようである。

三 上海租界の繁栄

悠久の歴史を誇る中国にあって、上海は新しい街である。長江河口に近い上海に、城壁で囲まれた県城が造られたのは明の時代、1553年⁴であった。理由は倭寇の襲撃から上海を守るためである。しかし現在のような中国最大の都市となる起点は、いうまでもなく1842年に結ばれた南京条約で上海が開港となってからである。それまでの上海はいわば寒村の一つであったが、とくに1845年から租界が形成され、イギリス、フランスを中心とする西欧列強の手で、近代都市形成が始まった⁵。上海は中国の都市であっても、中国人の都市ではなかった。千歳丸が上海に入港した時、すでに租界建設開始から17年経っており、西洋商館が立ち並んだ異様な光景を見ることができた。一種のコロニアル都市であった。上海は中国屈指の新興商業都市となり、世界の船が集まる貿易都市でもあった。多くの内外商船が上海港のある黄浦江(長江の支流)を行き交い、黒煙を吐く外国軍艦も威風を見せていた。

その繁栄する異様な光景を初めて目にした千歳丸の日本人は驚きの連続であった。

まず長江をのぼって呉淞から支流の黄浦江に入った千歳丸が目にしたものは、狭い黄浦江に浮かぶ無数の船舶であった。帆船の長いマストが林立し、遠くが見通せないほどであった。中国船はジャンクと呼ばれる小さな帆船が主流であろう。現在も帆をおろしたジャンクのマストが黄浦江に林立している光景をみることができる。

大村藩の峰潔はその光景を次のように記している。

「遥かに眺望するに諸国商船六百艘集、其柱上遠く臨むに冬山の林の如し。中に火輪舟五六十余艘あり。眩大なるは英仏の二艘なり。船長約五十六七間大砲五十柱備の蒸気軍艦なり」⁶(峰)

商船に交じって蒸気軍艦、すなわち幕末の日本を驚かせた黒船も碇泊していたのだ。

「昼四時過、上海の港に着船す。此処川横十町長四十町許の処、各国の夷船輻輳し、清国の艇船数知れず。帆檣の連立する恰も林の如く、実に繁花の地なり」⁷(峰)

「帆檣」とは帆船のマストのことである。「繁花の地」と驚いたのは峰潔一人ではない。納富介次郎、名倉予何人、中牟田倉之助も同じように船舶で混雑する黄浦江の姿に驚愕している。

「黄浦中来船するところの蛮船百余舟。中に軍艦十四五艘も有るべし。且唐船の碇泊する幾千と云ふ数を知らず。帆檣の多きは万頃の麻のごとし」⁸(納富)

「右岸には西洋諸国の商船櫛比し、壯観を極たり。実に支那諸港中第一繁昌なり所と聞し故、左も有べきなり」⁹(名倉)

「帆檣林立して前岸を望む能わず、数万の船舶江中に泊する事綿々として、我二里余に亘れり。本港の盛なる吾浪華の比に非ず」¹⁰(名倉)

「上海滞在之洋船百艘も可有之歟。唐船は一万艘も可有之歟。誠に存外之振にて候事」¹¹(中牟田)

船舶数は各人各様で、若干「白髪三千丈」的表現に似たいい加減な数を並べているが、上海の繁栄ぶりを伝える表現は、どれもこれもほぼ同じである。

岩瀬弥四郎が5月10日の「上海港碇泊外航船数」を明記している¹²。軍艦はイギリス13、フランス3、ロシア1の17艘、商船はイギリス53、フランス41、ハンブルグ8、支那5など合計120艘。他にデンマーク、スウェーデン、オランダ、プロイセン、ノルウェー、イスパニア、ロシア、日本など各国の商船で賑わっていた。

出帆した長崎も日本唯一の国際港であったが、比較するのが恥ずかしかったのであろう、比較の対象にすらしていない。浪華（大阪港）をあげているが、「比に非ず」という。

商人の松田屋伴吉は、「世界一番」の賑やかさと表現している。欧米を知らないから、世界とは中国を指すのかもしれない。

「呉淞江より上海迄五里斗之処は、唐漁舟誠に沢山、数不相知、世界一番之賑成処と相見へ」¹³
（松田屋）

驚くのはおびただしい船舶の数だけではない。マスト林立の向こうには、新しく立ち並ぶ洋館が忽然と目に入る。高杉晋作は、上海城に入手前の両岸に見える民家は日本の風景とほとんど変わらないが、租界に並ぶ各国の商館は城閣のようで、その壮大な様を筆では表現しがたい、と感嘆している。

「五月六日、早朝川蒸気船来、引本船、左折溯江、兩岸民家風景殆我邦無異、右岸有米利堅商館、…午前漸到上海港、此支那第一盛津港、歐羅波諸邦商船軍艦数千艘碇泊、檣花林森、欲埋津口、陸上則諸邦商館紛壁千尺、殆如城閣、其广大巖烈不可以筆紙盡也」¹⁴（高杉）

日比野輝寛はその形容を次のように表現し、最後に一句詠っている。

「各国の商館相連り、碇泊の船その多きたとへがたし。南方は連檣林立盡くる処なし。千歳丸各国の船間を走る十里余、岸を離る、里余にして下錨す。江は満抹皆船なり。陸は家屋比隣、何ぞ盛なるや。

帆檣林立渺無辺。終日去来多少船。請看街衢人不断。紅塵四合与雲連。

憶従曾有大沽患。市利網収老狒姦。休言上海繁華地。多少蕃船梱載還。」¹⁵（日比野）

以上は、静かに黄浦江へ滑り込んだ千歳丸船上から眺めた上海の景観である。

川面に映る夜景も綺麗だったのだろう。高杉晋作は「光景、昼の如し」という。「入夜、兩岸燈影泳水波、光景如昼」¹⁶（高杉）

宿は租界にある蘭館（オランダ領事館）附近のホテル宏記洋行であった。租界の商館附近は素晴らしい繁華街に映った。

「我旅亭は即此蘭館の隣宅にて宏記と云夷国造りの家を借り羈旅とす。此処は川端にして全面の道幅八九間或は十間、江に沿て往来あり。此辺は夷人居住以来、新に町家なども建し処にて、縦横に街路を割り、道幅広く、随て街中も稍清潔なり」¹⁷（峰）

「都而上海と申所は人間沢山に、而透間無之、其中に舟場は積荷揚荷に而混雜なること也」¹⁸
（松田屋）

肩が触れ合うほどの雑踏ぶりで、とくに上海人にとっても初めての日本人であるから、物珍しい。ちょんまげ姿と帯刀姿に人だかりとなって、取り囲まれた。

「日本人上陸致し候処、見物人群集り、頓と日本に先年異人婦人舁上陸いたし候時と同様、歩行出来かね賑成事也」¹⁹（松田屋）

「市井の人、（我）等を見んが為めに数百の人、門に潜りより、竊に群り来て我前後を取囲み、官人制するも恐るゝ色なく」²⁰（峰）

物珍しさで集まった人々をかき分け、前へ進まなければならなかった。名倉予何人は、まさに江戸の雑踏だという。

「其繁華雜沓なる事、本朝江戸に異ならず」²¹（名倉）

四 混沌の上海への幻滅

一見、欧米外国人による租界の建設で栄華を極めているように映った上海であったが、市中を徘徊できるようになると、繁栄の裏で苦悩する上海の姿をしっかりと認識することができた。

高杉晋作をはじめとした選りすぐられた各藩の藩士であるから、武士の教養を支えていた儒学の聖地である中国に、まだ見ぬ憧れを抱いていたのは十分に理解できる。ところが、その憧れの中国の無惨な姿に遭遇し、彼らは一様に愕然とし、一種の幻滅を深めていく。

一言でいえば、清王朝の衰退・衰微が生み出す社会的混乱と道義的墮落への苛立ち、そして西欧列強による侵略の危機にたいする清朝の無能さへの絶望感である。裏返せば、開国から倒幕に向かう日本の危機状況のもとで、幕末志士たちが抱いていた危機感から生まれる反応の一つである。

実は、1862年の中国は天下大動乱のまっただ中であつた。すなわち太平天国の革命運動が清朝の天下を根本から揺るがしていた。中国は外にあっては西欧列強の侵略、内にあっては太平天国を中心とする各地の叛乱が、清朝の支配を弛緩させていた。まさに内憂外患である。

この変動期、中央の皇帝支配が弛緩すれば、各地は秩序を失って混乱の極致に直面する。新興都市・上海も同じであつた。太平天国運動は洪秀全を最高指導者とする宗教結社による清朝打倒の革命運動であり、絶対平等を求める農民運動でもあつた。しかし、それは伝統的な王朝打倒の革命運動と異なり、キリスト教をベースとした宗教結社の農民運動でもあり、いわば伝統的な儒教秩序への意義申し建てでもあつた。

1853年、洪秀全は南京を占領し、そこに太平天国を建国し、異民族王朝の打倒を叫んだ。上海は南京の下流にあり、太平天国にとってみれば、まさに世界へ開かれる重要基地である。太平天国側は1862年1月から6月にかけて、第2次上海進攻を試みた²²。

この危機にあって、清朝はみずから上海を防衛する力を喪失し、上海の防衛を新しい支配者であるイギリスやフランスの軍隊に任せた。イギリス軍、フランス軍に支援されたF. T. ウォードの「常勝軍」は太平天国の進攻を食い止めていた。

それは上海の軍事的防衛を外国軍に任せるといふ、いわば国家主権を喪失した異常事態を意味していた。上海は政治的、経済的には租界建設に頼っていたが、太平天国との内戦では、軍事的にも外国の軍事力に依存してしまつた。

千歳丸が上海を訪れた時は、軍事的にも混乱期であつた。租界は新しい躍動的な契機を生みだしていたが、上海の古い中国人社会には、動乱からの難民が流入し、まさに無秩序な混乱を生み出していた。明らかに日本各地の城下町より混乱、退廃していた。その姿に、日本人は愕然とするのであつた。租界が放つ光に比べ、そこはあまりにも惨めであつた。光の影が鮮烈であつたからだ。

上海における街路の汚さ、上下水道の欠如など、日本の街に比べて劣る点が多かつた。「徘徊街市、土人如土橋匪我輩、其形異故也、每街門懸街名、酒店茶肆、与我邦大同小異、唯恐臭氣之甚而已」²³（高杉）

「土人」とは地元民という意味合いであるが、街並みは日本とあまり変わらなかつた。ただ臭気が強烈であつた。高杉晋作がいう臭気とは何か。

街中に糞尿が放置され、異臭を漂わせていたからである。

「上海市坊通路の汚穢なること云ふべからず。就中小衢間逕のごとき、塵糞堆く足を踏むに処なし。人亦これを掃くふことなし」²⁴（納富）

租界は比較的綺麗であつたが、一步外に出ると、中国人の街はゴミと糞尿に埋もれていた。当

時の上海では、各戸には便所がなく、屋内ではオマルで排便し、それを処理していた。なかには路上や空き地に穴を掘り、用を達していた。そのまま放置されることも少なくなかった。

この無秩序な原因は一体何故か。高杉晋作は急激な近代化における貧富の差であると語っている。

「上海は支那南辺の海隅僻地にして、嘗て英夷に奪はれし地、津港繁栄と雖ども、皆外国人商船多き故えなり、城外城裏も、皆外国人の商館多きか故に繁栄するなり、支那人の居所を見るに、多くは貧者にて、其不潔なると難道、或年中船すまいにて在り、唯富める者、外国人の商館に役せられ居る者也」²⁵（高杉）

豊かな外国人、貧しい中国人、このコントラストが租界と周辺の格差として映ったのである。

峰潔も、急速な租界の発展が、目先の利益指向に走らせ、地道な農業を駄目にし、糞尿を肥料とする農業の伝統を失わせた結果であるという、中国人の言葉を紹介している。

「上海中、糞芥路に満ち、泥土足を埋め、臭気鼻を穿ち、其汚穢言を可からず。依て土人に此事を詰問せしに以前は斯くまでなかりしに夷人往来以来、上海の繁昌に従て斯く道路の不潔になりしと云。是土人目前の利に走り日傭弄を専らとし、農業を切にせず、不浄を棄て田畠の肥しに用ひざるより自然路傍の尾篋になりしものなり」²⁶（峰）

糞尿以上に多くの日本人を困らせた問題は飲用水であった。困らせたどころか、命を落とす大問題であった。上海の水は最悪であった。それを飲まざるを得なく、下痢やコレラにかかり、合計3人が帰らぬ人となった。上海には上水道が無く、井戸も少なく、ほとんどが汚濁された黄浦江の濁水を使用するからである。

「市中井戸を穿たず。只城中三四ヶ所ありと云。依て皆江水を汲て日用とす。然るに江水重濁にし直に呑むこと能わず。明礬を以て濁泥の汚物を沈め、而後漸く呑む可し。是我国の人居留難渋の第一なり」²⁷（峰）

「川流濁水、英人云、数千錠泊船及支那人皆飲此濁水、予以為、我邦人始来此地未地氣、加之、朝夕飲此濁水、必多可傷人」²⁸（高杉）

「此度の上海行、最も艱苦に堪へざりしは濁水なり。…その上に土人死せる犬馬豕羊の類、その外総べて汚穢なるものをこの江に投ずる故、皆岸辺に漂浮せり。且又死人の浮べること多し。この時コレラ病の流行盛んなりしに、難民等は療養を加ふること能はず。或は飢渴に堪へずして死する者甚だ多し。又これを葬することを得ず。故にこの江に投ずるなるべし。寔にその景様目も当てられぬ計りなり。尚これに加ふるに、数万の船舶屎尿の不潔あり。井は上海街中纔か五六所ありと云ふ。然もその濁れること甚だし。故に皆この江水を飲む」²⁹（納富）

黄浦江の濁水に明礬を加えて澄ます以外に浄化の方法はなく、それでも病人は続出した。比較的飲料水に恵まれている日本人にとって、黄浦江の濁水を飲料水にする現実、繁栄する上海のアキレス腱のように映ったのであろう。

五 外国支配の危機感

上海に来て多くの随員藩士が幻滅したのは、上海防衛の名のもと、中国が外国軍に蹂躪され、多くの中国人が西洋人に畏れをなし、従属に甘んじている姿であった。いわば中国人としての誇り、伝統、主体性の喪失である。

黒船来航から始まった日本の危機意識が強い高杉晋作等は、まさに開国日本の行く末を見極めるため、先に開国された中国の視察を買って出たのである。

そこで目のあたりにした現状は、西欧列強の闊歩であり、清朝の衰退であり、植民地化されて

いく危機であった。まさしく、それは日本にとっても反面教師となるものであった。日本が尊皇攘夷から開国倒幕へ転換するなかで、上海訪問は一定の意義をもたらした。

まず高杉晋作は、イギリス人やフランス人が市内を闊歩すれば、中国人が避けて通る姿を嘆くとともに、それはいずれ日本もそうなるのではないかという危機感を示している。

「因熟觀上海之形勢、支那人盡為外国人之便役、英法（仏のこと）之人歩行街市、清人皆避傍讓道、實上海之地雖屬支那、謂英仏屬地、又可也、北京去此三百里、必可存中国之風、使親近及此地、嗟亦可為慨歎矣、因憶、呂蒙正諫宋太宗、以親近、不及遠、豈不宜也、雖我邦人、可須心也、非支那之事也」³⁰（高杉）

「我が邦人と雖も、心すべき也、支那の事に非ず也」というのである。卑屈な中国人に幻滅すると同時に、列強の圧力のもとにある日本の危機感をつのらせるものであった。

納富介次郎は、外国人跋扈を許している中国人に詰問した。誰も反論できなかったという。

「何ぞ洋人跋扈の甚しきを制せざる。これ清朝の却て外夷に制せらるゝところあらずやと。皆答ふるところなし」³¹（納富）

具体的には、儒者であった施渭南がオランダ人を見て、恐れ身を引いて頭を下げた。この光景を見た納富介次郎はその卑屈さに相当なショックを受けたようである。

「或日阿蘭のコンシュル所用ありて来り過ぐ。渭南これを見て、愕然として顔色土のごとく戦慄し立つてこれを拜す。怪しんでその故を問へば、渠れ過ぐるとき吾を睨む。その意我儕来りて貴邦の人と談ずるを悪しむべし。尚久しくせば、恐らくはその怒りにあはんと。…かくのごとく異人を恐怖する国勢の情態、歎ずるに堪へたり」³²（納富）

上海防衛の外国軍は、中国伝統文化の支柱であったはずの孔子廟を駐屯地としていた。荒れ果てた聖堂をみて、まさに中国精神が西洋に蹂躪されている象徴と映ったのである。日本人武士の多くが、その惨状を嘆いている。

「到聖廟、廟堂有二、…賊変以来英人居之、變為陣營、廟堂中、兵卒枕銃砲臥、觀之不堪慨嘆也」³³（高杉）

「学校は英人の陣屋となりて聖像も何処え散乱せんや影形も無く実に哀れなる形勢にて豈に大息に堪ざらんや」³⁴（峰）

孔子廟は、日本では儒学を講ずる聖堂であり、だから「学校」と表現した。

「英人小銃を持して聖廟を守る。…豈はからんや、この堂々たる聖廟英人の住するところとなり、学校に唔呻の声なくただ喇叭操兵の声あり。嗟、世の変ずる何ぞ甚だしきや。李鴻章数万の兵をひきいて野外に賊を防ぐ。それ狐を駆つて虎をやしなふか。何ぞ失策の甚だしきや」³⁵（日比野）

「孔夫子之廟、当時別所に変じ、英人の陣所と相成居申候由、誠に可憐也」³⁶（中牟田）

占拠されているのは、孔子廟だけではない。中国人が住む上海城は高い城壁に囲まれ、その城門は外国兵に管理されていた。自由に出入りはできない。

「西洋人え相頼、門番為致候処より、自国之城門を自国之人出入不叶様相成、賊乱之末故とは乍申、余り西洋人之勢盛なること、為唐人可憐。支那之衰微、押て可知候也」³⁷（中牟田）

納富介次郎も同じ思いであった。

「一日城内を徘徊し日暮れに臨んで帰らんとせしに、城門既に閉ちて往来を絶す。仏人等日本人と見て、即ち門を開けて通らしむ。然るに土人等これに乗じて通らんとするに敢て許さず。時に官人の肩輿に乗りて外より来り、仏人の制止を聞かず往かんとせし故、仏人怒りて持ちたる杖にて連撃し、遂にこれを退き回らしめし由。嗚呼清国之衰弱こゝに至る」³⁸（納富）

中国はまさに亡国に瀕しているにもかかわらず、中国人が危機意識を欠いていると、多くが嘆いている。太平天国の叛乱を自国の軍隊で鎮圧できず、外国軍に頼った不甲斐なさと、危機意識

だから峰潔は、五代十国時代、夷狄（契丹）を招き入れ、後唐を滅ぼした後晋の高祖・石敬瑭（漢奸の代表）を例に出して、外患を招くおそれを強く主張している。

「按するに石敬瑭、夷狄の力を借りて終に其大患を遣す。今清国唯其力を借るのみならず、自ら其城を守ること能わずして夷狄に託す。去れば他日患を遣すこと豈計る可んや」³⁹（峰）

六 中国人観の形成

多くの見聞録に流れるトーンは、総じていえば、上海を支配する西欧列強への警戒心であり、それを許している中国人への軽蔑心である。とくに当時の上海の特殊性がその感情を助長したと思われる。

太平天国運動はキリスト教を掲げていたから、伝統的な儒学文化への挑戦とも見なされ、いわば「長毛賊の叛乱」（松田屋伴吉は「長髪族」と表現）として、日本人にも否定的にとらえられていた。その鎮圧に異教徒であるイギリスやフランスに頼るとは、まさに中国文化の敗北であった。同時に、上海は戦争と動乱の時代が生み出す経済難民の坩堝であった。そこには繁栄と貧困が同時に存在していた。日本人に映った上海は、発展する西洋租界、没落する中国世界であり、その極めてクッキリ浮かぶ対照性が、日本人の中国観を形成したのであろう。

悲惨な生活を余儀なくされている一般庶民や兵卒にたいするまなざしは、哀れみを越えて軽蔑へ向かう契機を見いだすことができる。

峰潔は動乱期における食糧備蓄政策の必要性を唱えているが、その欠如が上海の悲劇を生んでいるとみなす。

「上海中四方の難民群集する故、米価日々沸騰し（米百斤にて錢九貫文、日本の相場にすれば二十七貫文に当る）、其外諸品何れも高料にて下賤の者は米或は牛豕等の肉を食する能はず。今日我船に来る日雇の者を見るに恰も餓鬼の如く骨と皮斗りて一人も支軀の肥たるを見ず」⁴⁰（峰）

このままでは餓死する。だが、清国官府はただ手をこまねいているだけで、無為無策だという。「按するに仁者有勇矣。若し仁者此十万の命旦夕にあるを見れば必ず憤発して是を救ん。今一人の是を哀れむなく、英仏等清国を助くと雖も亦利を是計較するのみにて真の仁心にあらず。故に此難民を見て奮だ救ざるのみならず、時に或は此を凌辱し少しも哀憐の情なし。嘆息に堪へざらんや」⁴¹（峰）

混乱の責任は「真の仁心」を持たない官僚である。峰潔には、単なる「嘆息」にとどまらず、中国庶民を凌辱する中国官府の無策への凌辱がにじんでいる。だから次のような言葉が発せられる。墮落した中国知識人とは違った日本武士みずからの優越性を誇示するためである。

「上海の陣屋に到て其兵卒を見るに士兵にて敵衣、垢面、徒跣、露頭、無刀。皆乞食の如く一人の勇あるを見ず。斯の如きは我が一人彼の五人に敵せん。若し一万騎の兵を率ひて彼を征せば清国に縦横せん」⁴²（峰）

一騎当千の意気込みを語るものであるが、いわば中国兵卒にたいする軽蔑的侮辱表現は、明治期から始まる日本の大陸政策の精神を彷彿させるものである。

さすがに高杉晋作は、中国の衰退は国策の誤りとみなす。

「支那之衰微者形勢略記に申候通候、然るに如此衰微せし者何故そと看考仕候に、必竟彼れ外夷を海外に防ぐ之道を知ざるに出し事に候、其証拠に者、万里之海濤を凌ぐの軍艦運用船、敵を数十里之外に防ぐの大砲等も制造成さず、彼邦志士之訳せし海国図志なども絶板し、徒に僻氣象（固陋之説）を以唱へ、因循苟且、空しく歳月を送り、断然太平之心を改め、軍艦大砲製造し、

敵を敵地に防ぐの大策無き故、如此衰微に至候事也、夫故、我日本にも、已に覆轍を踏むの兆有れ者、速に蒸気船の如き」⁴³（高杉）

だから高杉晋作は日本も外圧の危機に直面し、中国の轍を踏まないように、守旧派を打倒し、強力な海防策を講じる必要性を痛感した。

あまりにも荒廃する上海の中国人世界をみて、中国にたいする一種の憧憬は薄れてきたようである。名倉予何人は中国の現状を比較的淡々と紹介しているが、その他の武士連中は随所に、外夷に凌辱されている中国への憐れみから、糾弾、絶望、そして侮辱へエスカレートしていく様を読みとることができる。それは中国にたいする日本の優越性の強調にもみることができる。

「一日施渭南と云ふもの来り、詩を賦して扇面に書す。詩中納貢の事と蛮王云々の句ありければ、会津侯の藩臣林三郎勃然として大いに怒り、即ちその扇を抛つて曰く、我神国の天皇は万古一系革命有ることなく万邦に比すべきなし。豈汝が北虜王の類ならんや。憎き腐儒生甚だ以て無礼なりと云ふ」⁴⁴（納富）

伝統的な中華と夷狄の華夷秩序のもとでは日本は東夷である。中国人からみれば、天皇は当然ながら東夷の「蛮王」にすぎない。ところが万世一系の天皇は「北虜王の類」とは違うという。北虜王とは、満州族出身の清国皇帝を指すのかどうか不明であるが、そうであれば尚更の事であるが、天皇は中国皇帝を凌駕する存在であると強調したことになる。

倒幕の尊皇攘夷派と対立する会津藩の藩臣の怒りだけに興味を引かれるが、「神国天皇」を特殊化する国家意識の表れはこの時からすでに濃厚であった。それが転じて中国を蔑視する契機になる兆候をここにみることができる。

最近中国で出版された馮天瑜の研究書も同じような結論を出している。

「藩士たちはかつて『文化の母国』として崇めていた心理が、現実を目のあたりにすることで、動揺しはじめた。彼らが会った中国人は気概を失い、言動も自らを卑下し、藩士たちに軽蔑心理を引き起こした」「上海を初めて訪れた日本人が抱いた総体的な印象は次の通りである。広大な土地と民、悠久の文化伝統を有する清国は、すでに国勢が衰微し、民の気力も低迷してしまった。洋々たる大国は昔日の輝きが色褪せ、かくのごとく没落してしまった。西欧列強に凌辱され、割愛されたのは、すべて鎖国で自らを閉じ、民の気風は閉塞し、政治は腐敗したからである」

だから「上海行きで直接視察して得たものは『開国は急がなければならない』『弊政の改革は急がなければならない』という感想であり、それはまことに真実であった」という。さらに「清国内政外交の衰微は、日本藩士に往年の中国への尊敬を軽蔑の心理に変え、武士文化のなかに深く秘められていた対外拡張性を発酵させた」と結論づける⁴⁵。

武士文化の真髓が対外膨張性にあると断定するのは短絡的であるが、上海視察が①亡国の危機感をつのらせ、幕末の開国・改革に走らせる一助となったこと、そして②中国蔑視の芽を育んだということは、妥当な指摘であろう。

〔註〕

- 1 岩瀬弥四郎「文久西戊上海記録」県立長崎図書館蔵、7頁
- 2 千歳丸に関する日本の主要な研究は次の通り。
宮永孝『高杉晋作の上海報告』新人物往来社、1995年
春名徹「一八六二年幕府千歳丸の上海派遣」『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館、1987年
沖田一『日本と上海』大陸新報社、1943年
古賀十二郎「文久二年徳川幕府が初て官有商船千歳丸を長崎より上海へ渡航せしめた英拳に就いて」『長崎と上海』大阪朝日新聞長崎販売所出版部、1923年
また、中国では次の2点が刊行されている。

- 王晓秋「幕末日本人怎樣看中国 — 1862年『千歳丸』上海之行研究」『日本学』第1輯，北京大学出版社，1989年
- 馮天瑜『「千歳丸」上海行 — 日本人1862年的中国視察』商務印書館，2001年
- 3 高杉晋作「遊清五録」『東行先生遺文』民友社，1916年
- 中村孝也『中牟田倉之助伝』中牟田武信，1919年
- 納富介次郎「上海雜記」，日比野輝寛「贅狀録」「没鼻筆語」（以上は『幕末明治中国見聞録集成』第1巻，ゆまに書房，1997年。また『文久二年上海日記』全国書房，1946年，にも集成。ここでは，ゆまに書房版の頁を参照）。
- 名倉予何人「海外日録」「支那見聞録」，峰潔「船中日録」「清国上海見聞録」，松田屋伴吉「唐国渡海日記」（以上は『幕末明治中国見聞録集成』第11巻）。長崎商人の松田屋伴吉の記録は，県立長崎図書館に「唐国渡海日記」が別に存在する。筆書きの「日録」であるが，活字化された「日記」と比べれば，一致するところも多く，同時に「日記」にはない項目も多い。写本が異種を生んだのであろう。ここでは「日記」版を使う。
- 岩瀬弥四郎「文久西戌上海記録」県立長崎図書館蔵
- 4 熊月之主編『上海通史』第2巻（古代），上海人民出版社，1999年，81頁
- 5 史定梅主編『上海租界志』上海社会科学院，2001年。徐公爾・丘瑾璋『上海公共租界制度』1980年
- 6 峰潔「船中日録」前掲，15頁
- 7 峰潔「清国上海見聞録」前掲，25頁
- 8 納富介次郎「上海雜記」前掲，13頁
- 9 名倉予何人「海外日録」前掲，99頁
- 10 同前，104頁
- 11 『中牟田倉之助伝』前掲，219頁
- 12 岩瀬弥四郎「文久西戌上海記録」
- 13 松田屋伴吉「唐国渡海日記」前掲，54頁
- 14 高杉晋作「遊清五録」前掲，75～76頁
- 15 日比野輝寛「贅狀録」前掲，64頁
- 16 高杉晋作「遊清五録」前掲，76頁
- 17 峰潔「清国上海見聞録」前掲，27頁
- 18 松田屋伴吉「唐国渡海日記」前掲，55頁
- 19 同前，55頁
- 20 峰潔「清国上海見聞録」前掲，31頁
- 21 名倉予何人「海外日録」前掲，101頁
- 22 太平天国と上海については，英字新聞“North China Herald”の太平天国軍の関連記事を編纂した『太平軍在上海 — 《北華捷報》選訳』上海人民出版社，1983年を参照。
- 23 高杉晋作「遊清五録」前掲，76頁
- 24 納富介次郎「上海雜記」前掲，15頁
- 25 高杉晋作「遊清五録」前掲，104頁
- 26 峰潔「清国上海見聞録」前掲，28頁
- 27 同前，28頁
- 28 高杉晋作「遊清五録」前掲，76頁
- 29 納富介次郎「上海雜記」前掲，15～16頁
- 30 高杉晋作「遊清五録」前掲，79頁
- 31 納富介次郎「上海雜記」前掲，14頁
- 32 同前，19～20頁
- 33 高杉晋作「遊清五録」前掲，81頁
- 34 峰潔「清国上海見聞録」前掲，30頁
- 35 日比野輝寛「贅狀録」前掲，100頁
- 36 『中牟田倉之助伝』前掲，227頁
- 37 同前，225頁

- 38 納富介次郎「上海雜記」前掲, 39頁
- 39 峰潔「清国上海見聞録」前掲, 33頁
- 40 同前, 31頁
- 41 同前, 32頁
- 42 同前, 30頁
- 43 高杉晋作「遊清五録」前掲, 85頁
- 44 納富介次郎「上海雜記」前掲, 19頁
- 45 馮天瑜『「千歳丸」上海行 — 日本人1862年の中国視察』前掲, 299~300頁